四木会　ＮＯ・２８９　秀作集　２０２４・０４・１５

（特選）

☆漆黒の広き板の間雛飾り　　繁好

旧家の年代を経た真っ黒広い板の間に雛段が置かれている。雛飾りは、江戸中期頃から流行した名残りとみられており、現在でも女の子のいる家庭では行われている行事。代々に伝わってきた古色のお雛様の姿が目に浮かぶ。

・啓蟄や這ひ這ひの子の立ち上がり　　良月

啓蟄とは、二十四節気の一つで陰暦二月の節、陽暦では三月五日頃、地中の虫が皆動き戸を啓いて初めて出ることをいう。初春から仲春にかけて陽気が高まり、万物が動き始める。立ち上がる這い這いの子と啓蟄の取合せが絶妙である。

・隧道を抜けて棚田や山笑ふ　　邦夫

長いトンネルを出ると展望がひらけ、棚田が連なっており、四方の山々が明るい光と温かな空気に包まれている。その景はまさに山々が笑っているようにも見える。素直に写生した句で情景が目に浮かぶ。

（入選）

・山笑ふ過疎の村ゆく郵便夫　　良月
・日々通る暮らしの路地や山椒の芽　　一江
・箱根路の登山電車や山笑ふ　　忠男
・いぬふぐり笑顔もどりし試歩の妻　　進
・春炬燵足腰重き病み上がり　　かつを
・信州や延々として笑ふ山　　玄舟

（佳作）

・風光る足並そろふ鼓笛隊　　良月
・西行忌読み終わりたる山家集　　玄舟
・日溜りの雀砂浴び春兆す　　繁好
・百態の百観音や山笑ふ　　達也
・若者ら拓く荒地や山笑ふ　　繁好
・春雨や土の香りの泥シューズ　　たか志
・園児らの歌声ひびき山笑ふ　　清
・花求め旅の仕度や西行忌　　たか志
・西行忌花の芽ふふむ奥吉野　　進
・西行忌慈母観音に寄り道す　　一江
・活けられてより美しき椿かな　　尤子
・小買物ひとつ足したる花の種　　繁好